

「初冬直播き栽培」導入広がる

深層
レポート

岩手発

政府がコメ増産にかじを切る中、岩手県生まれの「初冬直播き栽培」が効果的な栽培法の一つとして存在感を増している。農閑期の初冬に種もみを直播きして越冬させることで田植えなどの作業を省け、コメづくりの規模拡大にも適している。これ、県外でも導入する動きが加速している。

手間が省け効率の

初冬直播き栽培は、岩手大学農学部の下野裕之教授を中心に平成20年から実用化に取り組んできた。種もみを寒さから守るためにチウラム水和剤（農薬の一種の種子消毒剤）を種もみにコーティングするのが大きな特徴で、農閑期の初冬に圃場に直播きした種もみを深さ1〜2センチの土の中で越冬させ春先に出芽させる。

岩手県内の一般的なコメづくりは、3〜4月に田起こしをしてから水入れ▽4月初めから1カ月がかりでハウス内での育苗▽5月初めに圃場に水を入れて土を砕いて均平に

コメの増産・担い手不足に対応



初冬直播き栽培の圃場で稲刈りをする阿部倫太郎さん
—今月、岩手県矢巾町（石田正広撮影）

していく代かきを実施▽ゴールデンウィーク明けから田植え—という流れになる。初冬直播き栽培は田起こし、育苗、代かき、田植えの手間が省けてコストダウンも期待できる。

下野教授が同栽培による効率化を目指してきた背景には、コメ農家の高齢化と担い手不足への危機感がある。農林水産省の農林業センサスによると、田の耕作地を持つ経営体は平成17年に174万戸だったが、令和2年には84万戸に半減している。この間の

水稲の耕作面積は208万haから178万haと減少幅は約15%にとどまっており、農業法人がリタイアした農家の圃場を委託栽培するなどの動きの中で1戸当たりの規模拡大が進んだ。

季節ずらしで労力分散

同栽培は春先に集中する農作業の手間を省く点から規模拡大に適し、国内のコメ生産の下支えにつながることも期待される。

58haでコメを栽培している岩手県八幡平市の「かきのうえ」は通常の田植えで17ha、4月に種もみを播く乾田直播きで31ha、初冬直播きで10ha

と3通りの栽培法を組み合わせている。それぞれ期間に幅があり、作業を分散させることができるため、初冬直播きの面積は5年前に比べて30倍超に広がっている。

立柳信光社長は「コスト面で育苗用のハウスを簡単に増やせない状況で、コメづくりのメインは技術が確立している乾田直播きだが、初冬直播きも労力の分散、苗づくりがないことを考えるとやる価値がある」と話す。

下野教授の目標は初冬直播きを雪のない地域も含め全国に広めることで、岩手大学農学部には普及に向けた「イネ初冬直播きの発展と普及を進める会」の事務局がある。初冬直播きは積雪寒冷地の東北、新潟県や北陸地方で導入が広がっており、収量も一般的なコメ栽培に匹敵する10ha当たり500〜600kgを達成している。

下野教授は「春の乾田直播きに匹敵する収量が確保できるような春の出芽率がより高いコーティング剤の開発を進めて、初冬から春先までの半年間「いつでも直播き」を実現させたい」と意気込む。16歳から初冬直播きに挑戦、栽培面積を1haに増やしている矢巾町の阿部倫太郎さん（18）は「10ha当たり9俵（540kg）前後は収穫できそう」と手応えを口にする。将来は50haで米づくりをするのが夢という阿部さん。コメ増産に向けてさらなる進化が目される。



イネ初冬直播きの発展と普及を進める会

専用サイトで初冬直播きの新技術などを提供している。登録会員は大学・研究機関▽生産者▽行政・普及機関・教育▽企業・J A・団体▽オブザーバー・その他に分類される。7月末の会員数は404で過半数の229が生産者。在住地域は35道県に達している。

記者の独り言

初冬直播き栽培の取材は7年目になる。その手法が、越冬して栽培する秋まき小麦と似ていて興味を持った。毎年、課題を一つ一つ克服する姿を追っているうちに気づいたら7年だった。今年になってコメ増産の号令で一躍、注目の栽培法になった。ブランド米では田植えすることが条件となっていることが主流だが、将来的にはこうした縛りがなくなるという見方を農家の人たちから聞く。初冬直播きがどう進化するかに期待している。

(石田正広)

※産経新聞 令和7年9月21日付 20面（千葉版）

産経新聞社の許諾を得て掲載しています

※無断転載・複写を禁じます